

『宋詩別裁集』に収録された陸游の七言絶句

三野 豊浩

〔要旨〕

清代の張景星らによって編まれた『宋詩別裁集』は、宋代の詩人百三十七家の合計六百四十七首を形式別に収録しており、南宋を代表する詩人陸游の作品は合計五十四首収録されている。本稿は、そのうち巻八に収録された七言絶句十五首を研究の対象とし、その詳細な訳注を作成することを課題とした。作業にあたっては、影印本の『宋詩別裁集』を底本とし、他に銭仲聯『劔南詩稿校注』、『全宋詩』などを参照した。

〔キーワード〕

中国古典文学、漢詩、宋詩、七言絶句、南宋、陸游、『劔南詩稿』、『宋詩別裁集』

『宋詩別裁集』(原名『宋詩百一鈔』)は、清代の張景星、姚培謙、王永祺によって編まれ、乾隆二十六年(二七六一)に誦芬樓より刊行された宋詩の選集で、宋代の詩人百三十七家の合計六百四十七首を形式別に収録している。同書は全八巻から成り、巻一は五言古詩(五十八首)、巻二は七言古詩(三十二首)、巻三は七言古詩二(四十七首)、巻四は五言律詩(百十五首)、巻五は七言律詩一(百首)、巻六は七言律詩二(百四首)、巻七は五言排律(四十首)、巻八は五言絶句(五十四首)及び七言絶句(九十七首)という構成になっている。他に、同じ編者による『元詩別裁集』(原名『元詩百一鈔』)があり、後人はこれらをやはり清代の沈徳潜が編んだ『唐詩別裁集』、『明詩別裁集』、『清詩別裁集』と合わせて、(唐・宋・元・明・清の)『五朝別裁集』と総称する。

さて、『宋詩別裁集』は、南宋を代表する詩人陸游(一一二五

（二二〇）の作品を合計五十四首収録しており、その内訳は、五言古詩四首、七言古詩十首、五言律詩三首、七言律詩十四首、五言排律三首、五言絶句五首、七言絶句十五首である。本稿では、このうち巻八に収録された陸游の七言絶句十五首を研究の対象とし、その詳細な訳注を作成することを課題とした。

『宋詩別裁集』巻八は、詩人三十七家の七言絶句合計九十七首を収録しており、その内訳は次の通りである（掲載順）。

王禹偁（二首）、魏野、林逋、宋祁、石介（各一首）、歐陽修（七首）、蘇舜欽（二首）、劉攽、司馬光（各一首）、王安石、蘇軾（各十三首）、米芾、郭祥正（各一首）、秦觀（三首）、晁補之（一首）、晁冲之（二首）、張耒（實際は鄭文宝）、陳師道、鄒浩、韓駒、李弥遜（各一首）、陳与義、程俱、朱松（各二首）、朱棹、周必大（各一首）、范成大（五首）、陸游（十五首）、楊万里、朱熹（各二首）、張栻（三首）、汪莘、周文璞、戴復古、黃大受、武衍、謝枋得（各一首）。

このように、陸游は三十七人中二十八人目に配置されているが、収録数十五首というのは三十七家中最多であり、群を抜いている。これに次ぐのは、王安石と蘇軾の各十三首であり、他には歐陽修の七首、范成大的五首がやや突出している程度である。その他の詩人たちの作品は、すべて三首以下である。全体的な印象として、清楚で高雅な、いかにも文人（もしくは道学

者）好みの詩が多く選ばれており、錢鍾書氏の『宋詩選注』（一九五八年九月、人民文学出版社）が、労働大衆の生活を描写するリアリズムの詩を多く収録しているのとは、鮮明な対照をなしている。ちなみに『宋詩選注』は陸游の詩を合計三十二首選んでおり、そのうち七言絶句は半数の十六首を占めているが、その中に『宋詩別裁集』と重複する作品は一首も存在しない。

ここで、作者の陸游について簡単に紹介しておこう。陸游、字は務観。号は放翁。越州山陰（現在の浙江省紹興市）の人。南宋最大の詩人で、同時代の范成大・楊万里・尤袤と共に「中兴四大家」と併称される。高宗の紹興年間に科挙に応じながら、講和派の宰相秦檜に排斥されて落第し、孝宗が即位した後、特別に進士出身を賜る。中年に蜀（四川省）に入り、前後して南鄭の王炎と成都の范成大的幕僚となる。蜀を離れた後は、晩年の時間のほとんどを故郷に隠退して過ごした。生涯にわたって北方の敵国金への抵抗を声高に主張し、臨終の際にも、南宋の軍隊が北方の中原を平定することを願ってやまなかった。その情熱的な人柄と作品のため、一般には「愛国詩人」の通称で知られるが、悲憤慷慨の詩の他に、日常生活の興趣を細やかな筆致でうたった閑適の作品も多数存在する。中国文学史上最も多作な詩人としても知られ、九千首を超える作品が現存する。詩集として『劍南詩稿』があり、文集として『渭南文集』がある。それでは以下、『宋詩別裁集』に収録された陸游の七言絶句を、順に紹介して行くことにする。作業にあたっては、影印本

の『宋詩別裁集』（一九七五年十一月、中華書局）を底本とし、他に『宋詩別裁集』（一九七八年十月、上海古籍出版社）、『宋詩別裁集』（一九九七年八月、河北人民出版社）、錢仲聯『劍南詩稿校注』（一九八五年九月、上海古籍出版社。以下『校注』と略称）、『全宋詩』（一九九八年十二月、北京大學出版社）その他を参照した。詩の表記は、すべて新字新仮名遣いとした。

次韻周輔道中

周輔の「道中」に次韻す

『劍南詩稿』卷五。二首連作の第一首。淳熙元年（一一七四）九月、陸游五十歳、大邑（四川省）にて。南鄭（陝西省）の前線を離れて成都（四川省）に赴任した後、蜀の各地を転々としていた時期の作。『校注』第一冊、四五七頁。『全宋詩』卷二一五八。第三十九冊、二四三六六頁。『全宋詩』では詩題の下に「二首」の二字がある。

○○●●●○○○
 ●●●○○●●○
 ●●○○○●●●
 ○●●●○○○

山靈喜我馬蹄声
 山靈 我が馬蹄の声を喜び
 正用此時秋雨晴
 正に此の時を用て 秋雨 晴る
 日淡風斜江上路
 日は淡く風は斜めなる江上の路

芦花也似柳花輕 芦花も也た柳花の輕きに似たり

〔韻字〕声、晴、輕（下平声八・庚韻）

○周輔 呂商隱、字は周輔、成都の人。乾道二年（一一六六）の進士。『春秋』の学を治めた。『三蘇遺文』を編集し、陸游がそのために題跋を書いている（『渭南文集』卷二十七）が、今日では失われた。その詩は、『全宋詩』卷一九三九（第三十四冊、二一六六二頁）に、五言古詩一首のみが収録されている。なお『劍南詩稿』では、本詩の直前に「九月三日 呂周輔教授と同一大邑の諸山に遊ぶ」詩（『詩稿』卷五）がある。○道中 未詳。呂商隱の原詩もやはり七言絶句であったと思われるが、『全宋詩』には収録されていない。○山靈 山にすむ精靈。山の神。○正用此時 「用」は「以」に同じ。ちようどこの時に。○江上 川のほとり。○柳花 柳絮をさす。

《呂周輔氏の「道中」の詩に次韻して》

山にすむ精靈は、私の馬のひづめの音を喜んでくれたとみえ、（そのおかげで）ちようどこの（出発の）時に、秋の雨が晴れ上がった。日が淡く照らし、風が斜めに吹きつける、川のほとりの道。アシの花もまた、柳絮のように軽やかに空中を舞っている。

花時遍遊諸家園

花時かじ 遍あまねく諸家しよかの園に遊ぶ

『劍南詩稿』卷六。十首連作の第一首、第二首、第八首、第九首。淳熙三年（一一七六）二月、陸游五十二歳、成都にて。范成大の參議官となつていた時期の作。宋代の詩人たちは海棠の花を好んでうたつたが、陸游りゆうのこの連作は、その代表的なものの一つである。『校注』第二冊、五三八頁。『全宋詩』卷二一五九。第三十九冊、二四三八九頁。『全宋詩』では詩題の下に「十首」の二字がある。なお其の一、其の二、其の八は『宋詩鈔』及び『宋詩精華録』にも収録されている。

其の一

●○○●●○○○
看花南陌復東阡 花を看る 南陌 復た東阡
●●○○●●●○
曉露初乾日正妍 曉露 初めて乾き 日 正に妍なり
●●●○○●●●
走馬碧鷄坊裏去 馬を走らせて碧鷄坊裏に去けば
○○●●●○○○
市人喚作海棠顛 市人 喚びて海棠顛と作す

〔韻字〕 阡、妍、顛（下平声一・先韻）

○南陌復東阡 「陌」は、東西に走る道。「阡」は、南北に走る道。ここでは、東西南北どこへでも花を眺めに出かけて行くことをいうのであろう。○曉露 朝露。○初乾 乾いたばかり。「初」は、したばかり、の意。○妍 美しい。○碧鷄坊 成都の町の西南にあつた花の名所。○市人 成都の町の人々。○海棠顛 海棠狂い。海棠三昧。

《花の季節に、広くあちこちの庭園をたずね歩いて》

その一

南の道へ、また東の道へと、あちこちへ花を見に出かけて行く。朝露はようやく乾いたばかりで、太陽の光は美しく輝いている。馬を走らせて碧鷄坊の中へと入つて行けば、そんな私のことを、成都の町の人たちは「海棠狂い」と呼ぶことだ。

其の二

●●○○●●●○
為愛名花抵死狂 名花を愛するが為に 死に抵るまで狂す
○○○○●●○○○
只愁風日損紅芳 只だ愁う 風日の紅芳を損なわんことを
●○○●●○○○○
綠章夜奏通明殿 綠章もて 夜 通明殿に奏すらく
●●○○●●●○
乞借春陰護海棠 春陰を乞借して 海棠を護らんと

〔韻字〕 狂、芳、棠（下平声七・陽韻）

○風日 吹きつける風と照りつける日ざし。○紅芳 赤くかくわしい海棠の花。○綠章 上奏文を書くのに用いる緑色の紙。道士が鬼神を祀る際にも用いる。○通明殿 道教の最高神である玉帝が住むとされる宮殿の名。常に雲に覆われているという。○春陰 春の曇り空。○乞借 もとめ借りる。

《花の季節に、広くあちこちの庭園をたずね歩いて》

その二

名花を愛するがゆえに、死ぬほどもの狂おしい気持ち。ただ、吹きつける風と照りつける日ざしが、赤くかくわしい海棠の花を損ないはしないか、ということだけが心配だ。そこで夜、緑色の紙に上奏文をしたため、通明殿にいらつしやる玉帝様に「どうか春の曇り空をお借りして、海棠の花を守らせてください」とお願いすることにした。

其の八

○○○○●●○○

糸糸紅萼弄春柔

糸糸たる紅萼 春柔を弄ぶ

●●○○●●○○

不似疎梅只慣愁

似ず 疎梅の只だ愁いに慣れたるに

○○●●○○●●

常恐夜寒花索寞

常に恐る 夜寒くして 花索寞ならんことを

●○○●●○○○

錦茵銀燭按涼州

錦茵 銀燭 涼州を按ぜん

〔韻字〕 柔、愁、州（下平声十一・尤韻）

○糸糸紅萼 たくさん細い糸を垂らしている真つ赤な海棠の花。海棠の花は糸状の細い突起が多数あり、しかも下向きに咲く。『民国華陽県志』に「垂糸の海棠、花は繁密にして、蓓蕾（つぼみ）は攢簇（さんさく）〔群がり集まる〕して椒（はじかみ）の實の如く、色は艶にして臙脂に似たり」とある。「萼」は、花の一番外側にあつて、花びらを支え守る部分。ただし、ここでは平仄の都合で「紅花（○○○）」を「紅萼（○●●）」と言ひ換えたとも考えられるので、海棠の花全体をさしていると考えて特に問題なからう。○弄春柔「弄」は、戯れる。「春柔」は、春の植物のやわらかい木の枝。この場合、海棠の花がやわらかい木の枝の上で遊び戯れるかのように揺れていることをいうのであろう。北宋・王安石の「鍾山即事」詩に「竹西の花草 春柔を弄ぶ」とある。○疎梅まばらに咲いている梅の花。○慣愁 梅の花が、ただひたすら愁いを帯びていることをいう。梅はまだ寒気の残る早春に咲き、しかもその花には海棠のようなはなやかさはないので、このようにいうのであろう。しかし、その一方で陸游には梅をう

たった詩も多数存在し、決して梅の花を低く評価していたわけではないことがわかる。○索寞 ものさびしいさま。○錦茵 錦のしとね。美しい模様を織り出した敷き物。○銀燭 明るく光るともしび。○按 本来は、手で押さえる、の意だが、ここでは、楽器を手で押さえて演奏する、の意。○涼州 曲名。涼州詞ともいう。『樂府詩集』卷七十九「近代曲辞一」によれば、宮調の音楽で、唐の開元年間に西涼府都督の郭知運が進めたものであるという。

《花の季節に、広くあちこちの庭園をたずね歩いて》

その八

たぐさんの細い糸を垂らしている真つ赤な海棠の花が、やわらかい木の枝の上で遊び戯れるかのように揺れている。その風情は、まばらに咲く梅の花がただひたすら愁いを帯びているばかりなのには似ていない。いつも心配なのは、夜が寒いので、花たちがさびしい思いをしはしないか、ということだ。(そこで、花たちを楽しませるために) 美しい模様のある敷き物をして、明るくともしびを照らして、(にぎやかに) 涼州の曲を奏でることしよう。

其の九

○○●●○○○

飛花尽逐五更風

飛花 尽く五更の風を逐い

●●○○●●●○

不照先生社酒中 先生の社酒の中に照らず

○●○○○○●●

輸与新来双燕子 新来の双燕子に輸与すれば

○○○○●●○○

銜泥猶得带残紅 泥を銜みて猶お残紅を帯びたるを得たり

〔自注〕今年二月二日社、而海棠已過。

今年 二月二日に社あり、而して海棠 已に過ぎたり。

〔韻字〕風、中、紅(上平声一・東韻)

○飛花 風に吹かれて散る花びら。○五更 明け方の時刻。○不照 影がうつらない。○先生 陸游自身をさす。○社酒 春祭りの祝いの酒。「社」は、土地の神に豊作を祈る祭り。○輸 与 送り与える。「輸」は、送る。○新来双燕子 新しく飛んで来たばかりのつがいのツバメ。「子」は、接尾語。○銜 泥 ツバメが巣作りのため口に泥をくわえて運ぶこと。○带残 紅 ツバメのくわえた泥に花びらがまじり、かすかに赤みを帯びていることをいうのであろう。

《花の季節に、広くあちこちの庭園をたずね歩いて》

その九

海棠の花びらは、夜明けの風に吹かれてすっかり散り落ちて

しまい、私が手にする春祭りの祝い酒にその影がうつることはない。散り落ちた花びらを、新しく飛んで来たばかりのつがいのツバメに送り与えてみたところ、泥を口にくわえて、なおもかすかに名残りの赤みを帯びているものを手に入れた。

〔自注〕 今年は二月二日に春の祭りがあつたが、(その時には) 海棠はすでに盛りを過ぎていた。

楚城

楚城

『劍南詩稿』卷十。淳熙五年(一一七八)五月、陸游五十四歳、歸州(湖北省)にて。蜀を離れ、東に歸る船旅の途中での作。ここで陸游は、はるか昔の憂国の詩人屈原(およそ紀元前三四〇頃〜前二七八)に思いを馳せている。『校注』第二冊、七九〇頁。『全宋詩』卷二一六三。第三十九冊、二四四六一頁。なお本詩は『宋詩鈔』『唐宋詩醇』及び『千首宋人絶句』にも収録されている。

○●○○○○●●

江上荒城猿鳥悲

江上の荒城

猿鳥 悲しむ

●●●●●●●●

隔江便是屈原祠

江を隔つるは 便ち是れ屈原の祠なり

●●●●●●●●

一千五百年間事

一千五百年間の事

●●○○○○●●

只有灘声似旧時

只だ灘声の旧時に似たるのみ有り

〔韻字〕 悲、祠、時(上平声四・支韻)

○楚城 楚王城ともいう。戦国時代の楚の国の旧都で、遺跡は現在の湖北省秭歸県にある。○江上 ここでは、長江のほとり、の意。○屈原 戦国時代、楚の国の人。屈平ともいう。楚の懷王及び頃襄王に仕えたが、讒言にあつて放逐され、汨羅に身を投げて死んだという。『楚辭』にその作品が収録されている。○祠 陸游の「歸州の重五」詩(『詩稿』卷十)の自注に「屈平の祠は(歸)州の東南五里の歸郷沱に在り。蓋し(屈)平の故居なり」とある。○一千五百年間 屈原の時代から陸游の時代までの、およその隔たり。○灘声 早瀬を流れる水の音。○旧時 昔。

《楚の国の古城》

長江のほとりにそびえる荒れ城のあたりでは、猿たちや鳥たちが悲しげに鳴き叫んでいる。川を隔ててすぐそこにあるのは、あの屈原をまつた祠。屈原の当時から今日に至るまで、およそ千五百年の間(その間に、どれほどの有為転変があつたことか)。今ではただ、早瀬を流れる水の音が、その昔に似ているばかり。

夜読呂化光文章抛尽愛功名之句戯作

夜 呂化光の「文章 抛ち尽くして功名を愛す」の句を
読み、戯れに作る

『劍南詩稿』卷二十九。紹熙五年（一一九四）春、陸游七十歳山陰にて。何ら功名を立てることなく挫折の晩年を迎えたことを、自嘲気味にうたっている。『校注』第四冊、一九八九頁。『全宋詩』卷二二八二。第三十九冊、二四八五三頁。

●○○●○○○

●●○○○○○

●○○●○○○

●○○●○○○

●○○●○○○

●○○●○○○

●○○●○○○

●○○●○○○

●○○●○○○

〔韻字〕秋、由、州（下平声十一・尤韻）

○呂化光 呂温（七七二〜八一二）、字は化光。唐の詩人。『旧唐書』卷一三七に伝がある。「文章」云々の句は、呂温の七言絶

句「友人を邀え、歌を聴きて感有り」の第一句。全体は次の通り。「文章抛尽愛功名、三十無成白髮生。辜負壯心羞欲死、勞君貴買斷腸声（文章 抛ち尽くして功名を愛するも、三十にして成る無く、白髮 生ず。壮心に辜負し〔そむき〕羞じて死せんと欲す、君を勞して貴くも買う 断腸の声）」。○玉関 玉関。甘肅省敦煌の西にあつた、最果ての関所。○氣横秋 鋭気が、秋の空いっぱい満ちあふれる。陸游の「憤りを書す」

詩（『詩稿』卷十七）に「中原 北望すれば氣は山の如し」という類似の表現が見える。○肯信 反語。どうして信じることができようか、の意。○功名不自由 功名は自分自身の力によつて得られるものではなく、運命の力によるものなのだ、ということ。○却 意外な感じを表す。何とまあ。○差 いくらか。○呂衡州 呂温のこと。呂温は左遷されて、衡州（湖南省）で没した。

《夜、呂温の「文章をすっかり投げ捨て、功名を愛する」という詩句を読み、たわむれに詩を作った》

西のかなたにある玉門関の方向を眺めれば、鋭氣は秋の空いっぱい満ちあふれんばかり。功名は自分自身の力によつて得られるものではなく、運命の力によるものだ、などということが、（その時は）どうして信じられたであろうか。ところが何とまあ、（かつての抱負が挫折した今となつて）かえつて文章の方は、少しばかり実力をつけることができた。そんな今に

なつてようやく、「文章をすっかり投げ捨て、功名を愛する」という句を作った）呂温のような人もいたのだ、ということを知ることになるうとは。

梨花 梨の花

『劍南詩稿』卷六十六。三首連作の第一首、第二首。開禧二年（二二〇六）春、陸游八十二歳、山陰にて。梨の花に触発されて、南鄭時代を回想している。『校注』第七冊、三七二〇頁。『全宋詩』卷二二一九。第四十冊、二五四三六頁。『全宋詩』では詩題の下に「三首」の二字がある。なお其の一は『唐宋詩醇』にも収録されている。

其の一

○●○○○●●○
 開向春残不恨遲 開きては春残に向かうも 遅きを恨まず
 ●●●●●○
 緑楊窳地最相宜 緑楊 地に窳れたるは 最も相宜し
 ○●●●○○○●
 征西幕府煎茶地 征西幕府 茶を煎るの地
 ●●○○○●●○
 一幅辺鸞画折枝 一幅の辺鸞に折枝を画く
 （自注）宣司静鎮堂屏上、有辺鸞梨花。

宣司の静鎮堂の屏上に、辺鸞の梨花有り。

〔韻字〕遲、宜、枝（上平声四・支韻）

○「向」意味は「於」に同じ。この箇所では平仄の都合で平字が使えないので、平字の「於」のかわりに仄字の「向」を用いたのであろう。○春残 春の終わり頃。「残」は、そこなわれる、の意。○緑楊 青々とした柳。○窳地 地面に垂れ下がる。唐・玄宗の「初めて秦川に入り、路に寒食に逢う」詩に「灞岸の垂楊 地に窳れて新たなり」とある。○征西幕府 当時の金との国境地帯の前線基地である南鄭（陝西省）にあった王炎の幕府。「征西」は、西方を攻略する、の意。陸游は、乾道八年（一一七二）三月から十月までここで過ごした。○辺鸞 唐代の画家。花鳥画に巧みで、折れた枝の風情を絶妙に描いたという。唐・朱景元の『唐朝名画録』に「辺鸞は、京兆の人なり。少くして丹青（絵の具）を攻め、最も花鳥に長じ、折枝草木の妙、未だ之れ有らざるなり」とある。○宣司 四川宣撫使司の略称。王炎の官名。○静鎮堂 南鄭の幕府にあった建物の名。陸游には「静鎮堂の記」（『渭南文集』卷十七）がある。

《ナシの花》その一

花が開く時はすでに春の終わり頃になっているものの、時期が遅いことを恨んだりはいしない。青々とした柳の枝が地面に垂

れ下がっているのは、(白いナシの花の風情に) 最も似つかわしい。西方攻略の幕府の茶をわかすための場所には、辺鸞の(描いた) 枝が折れたナシ(の花) の絵が一幅あったものだ。

〔自注〕 四川宣撫使司の(幕府の) 静鎮堂の屏風には、辺鸞のナシの花の絵が描いてあった。

其の二

●○○●●●○

粉淡香清自一家

粉淡 香清 自ら一家

●○○●●●○

未容桃李占年華

未だ容さず 桃李の年華を占むるを

○○○●●○○●

常思南鄭清明路

常に思う 南鄭 清明の路

●●○○●●●○

醉袖迎風雪一杈

醉袖 風を迎え 雪一杈

〔韻字〕 家、華、杈(下平声六・麻韻)

○粉淡 梨の花が、白粉のように淡白な色をしていることをさす。○香清 梨の花の香りが清らかなことをさす。○容許す。許容する。○年華 春の光。また、一年の中のよい時節。○南鄭清明路 「南鄭」は、王炎の幕府があった場所。「清明」は、清明節。二十四節氣の一つで、春分から十五日目、寒

食の二日後に当たる。『劔南詩稿』卷三には「金牛の道中にて寒食に遇う」詩があり、これによって、陸游は乾道八年の清明節を、夔州(四川省) から南鄭に向かう道中で迎えたことがわかる。○醉袖迎風 酒に酔った詩人の服の袖に、風が吹きつける。○雪一杈 木の枝全体に咲いた、雪のようにまっ白なナシの花。「雪」は、梨の花の形容。「一」は、全体。「杈」は、ま たになった木の枝。おそらくは、本来ならば「一枝」と言うべきところを、韻の都合で文字を置き換えたのであろう。

《ナシの花》その二

白粉のように淡い色あいと、すがすがしい香り。その風情は、おのずから一家をなしている。モモやスモモが春の光を独占することを、いまだ許しはしない。いつも思い出すのは、(夔州から) 南鄭へと向かう道中、清明節の頃、酒に酔った服の袖を風に吹かれながら、木の枝全体に咲いた雪のようにまっ白なナシの花を、めで楽しんだことだ。

春遊絶句

春遊絶句

『劔南詩稿』卷十七。淳熙十三年(一一八六)春、陸游六十二歳、山陰にて。春のそぞろ歩きの興趣をうたう。『校注』第三冊、一三五九頁。『全宋詩』卷二七〇。第三十九冊、二四六四一頁。なお本詩は『唐宋詩醇』にも収録されている。

●●●○○○

一百五日春郊行

一百五日 春郊を行けば

●●●○○○

三十六溪春水生

三十六溪 春水生ず

○○●●●●●

千秋觀裏逢急雨

千秋觀裏 急雨に逢い

●●○○●●●○

射的峰前看晚晴

射的峰前 晚晴を見る

〔自注〕 自秦望山而北、合三十六溪水為若耶溪。

秦望山より北、三十六溪の水を合して若耶溪と為る。

〔韻字〕 行、生、晴（下平声八・庚韻）

○一百五日 寒食の日のこと。冬至の翌日から数えて百五日目
に当たるのでいう。○春郊 春の野辺。○三十六溪 若耶溪
の水源をなす三十六の溪流。陸游の自注参照。○千秋觀 山陰
の東五里にあった道觀の名。○急雨 にわか雨。○射的峰 山
陰の南十五里にあった山の名。射的山。○晚晴 夕方の晴れ
空。○秦望山 山陰の南三十里にあった山の名。

《春のそぞろ歩きの絶句》

寒食の日に春の野辺を散歩すれば、三十六ある若耶溪の支流
には、いずれも春の水が湧き出ている。千秋觀の中でにわか雨

にあい、射的峰の前で夕方の晴れ空を眺めやる。

〔自注〕 秦望山以北の三十六の谷川の水が合流して、若耶溪となる。

舎北望水郷風物戯作絶句

舎北にて水郷の風物を望み、戯れに絶句を作る

『劍南詩稿』卷二十五。紹熙三年（一二九二）秋、陸游六十八歳、
山陰にて。『校注』第四冊、一八〇八頁。『全宋詩』卷二二七八。
第三十九冊、二四七九二頁。なお本詩は『唐宋詩醇』にも収録
されている。

○○○○●●○○

西風沙際矯輕鷗

西風の沙際 輕鷗 矯がり

●●○○●●●○

落日橋邊繫釣舟

落日の橋邊 釣舟を繫ぐ

●●●○○○●●

乞与画工团扇本

画工に乞与す 团扇の本

○○○○●●○○

青林紅樹一川秋

青林 紅樹 一川の秋

〔韻字〕 鷗、舟、秋（下平声十一・尤韻）

○舎北 自分の住む家の北側。陸游には、本詩の他にも七言絶

句「舎北晚眺」二首（『詩稿』卷三十三）がある。○西風 秋風。西は、秋を象徴する方向。○沙際 水際。○矯 高くあがる。○輕鷗 軽やかに飛ぶカモメ。○橋辺 橋のたもと。○乞与 貸し与える。○画工 画家。絵かき。○团扇本 うちわに描く絵のための見本。○一川 川一面。川全体。「一」は、全体。

《家の北で水郷の風物を眺め、たわむれに絶句を作った》

秋風の吹く水際では軽やかに飛ぶカモメが空高く舞い上がり、落日に照らされる橋のたもとには、釣り舟がつながれている。この風景を、うちわに描く絵の見本として、絵かきに貸し与えてやりたいものだ。青々とした林、赤く色づいた木々、そして川全体にただよう秋の風情。

三峽歌

并序

三峽の歌 並びに序

『劍南詩稿』卷三十。九首連作の第三首、第九首。紹熙五年（一九四）冬、陸游七十歳、山陰にて。『校注』第四冊、二〇六八頁。『全宋詩』卷二一八三。第四十冊、二四八七九頁。『全宋詩』では詩題の下に「九首」の二字がある。なお本詩は二首とも『宋詩鈔』及び『唐宋詩醇』にも収録されている。『宋詩別裁集』には序は収録されていないが、参考までに次にあげる。

乾道庚寅、予始入蜀、上下三峽屢矣。後二十五年、帰耕山

陰、偶読梁簡文巴東三峽歌、感之擬作九首、実紹熙甲寅十月二日也。

乾道の庚寅、予 始めて蜀に入り、三峽を上下すること屢しばなり。後二十五年、山陰に帰耕し、偶たま梁簡文の「巴東三峽の歌」を読み、之に感じて九首を擬作す。実に紹熙甲寅の十月二日なり。

○乾道庚寅 乾道六年（一一七〇）、陸游四十六歳。乾道は、南宋の孝宗の年号。○帰耕 故郷に帰つて農業に従事する。○三峽 四川・湖北省の境にある長江上流の三つの峽谷。瞿唐峽、巫峽、西陵峽の三つとするのが一般的であるが、異説もある。○山陰 現在の浙江省紹興市。陸游の故郷。○梁簡文 南北朝時代の梁の簡文帝。○巴東三峽歌 『樂府詩集』卷八十六に「巴東三峽の歌」二首が収録されている。ただし、嚴密にはこの詩は梁の簡文帝の作ではなく、邊欽立『先秦漢魏晉南北朝詩』の「梁簡文帝蕭綱」の部分にも収録されていない。『樂府詩集』では、この詩の直前に梁の簡文帝作の「淫預の歌」が掲載されているので、おそらく陸游は『樂府詩集』で「巴東三峽の歌」を読んだ際、この詩も同じ作者のものとして誤認したのではないかと思われる。○紹熙甲寅 紹熙五年（一一九四）、陸游七十歳。紹熙は、南宋の光宗の年号。

《序》乾道六年、私は始めて蜀の地に入り、三峽をしばしば

上り下りした。それから二十五年たつて、山陰に帰郷して農業に従事し、たまたま梁の簡文帝の「巴東三峡の歌」を読み、これに感慨を催し、それをまねて九首の詩を作った。実に、紹熙五年十月二日のことである。

其三

●●○○●●◎

十二巫山見九峰

十二巫山 九峰 見る

○○●●●○○◎

船頭彩翠滿秋空

船頭の彩翠 秋空に満つ

○○●●●○○●

朝雲暮雨渾虚語

朝雲 暮雨 渾ては虚語なり

●●○○○○●◎

一夜猿啼明月中

一夜 猿は啼く 明月の中

〔韻字〕 峰（上平声二・冬韻）、空、中（上平声一・東韻）通押

○十二巫山 巫山の十二の峰。『方輿勝覽』によれば、望霞、翠屏、朝雲、松巒、集仙、聚鶴、淨壇、上昇、起雲、飛鳳、登龍、聖泉の十二峰。○九峰 十二峰のうち、長江に浮かぶ船上から肉眼で確認できる九つの峰。陸游の『入蜀記』巻六、十月二十三日の項に「十二峰は、悉くは見るべからず。見る所の八九峰、惟だ神女峰のみ最も織麗奇峭為り、宜しく仙真の託す

る所と為すべし」とある。○船頭 船の進む方向。船の前方。○彩翠 美しい緑色。ここでは、長江の兩岸に立ち並ぶ山々の色合いをさすのであろう。○朝雲暮雨 宋玉「高唐の賦」の、楚の襄王が夢の中で巫山の神女と契りを結んだ後、神女が王に向かつて「旦には朝雲と為り、暮れには行雨となる」と云々と約束した、という故事をふまえる。○虚語 虚言。空言。○一夜 一晚中。

《三峡の歌》その三

巫山の十二の峰のうち九つの峰がその姿を現し、船の進む方向には、美しい緑色の山々が秋の空いっぱいそびえ立っていた。「朝には雲となり、暮れには雨となる」と約束したという巫山の神女の伝説は、すべて空言であったのだ。（夕方になつても雨は降らず）一晚中、猿は明るく照らす月の光の中で、悲しげに鳴いていた。

其の九

●○○○○●◎

我遊南賓春暮時

我 南賓に遊ぶ 春暮の時

●○○●●●◎

蜀船曾繫挂猿枝

蜀船 曾て繫ぐ 挂猿の枝

○○○●●○○●

雲迷江岸屈原塔

雲は迷う 江岸 屈原の塔

○●○○○●●●○
 花落空山夏禹祠 花は落つ 空山 夏禹の祠

〔韻字〕時、枝、祠（上平声四・支韻）

○遊 ふらりと訪れる。なお「二四不同、二六対」の規則に照らせば、ここは本来仄字でなければならぬはずだが、平字の「遊」が用いられており、破格の句法となっている。○南 寶 地名。忠州南寶郡（四川省）。陸游は、淳熙五年（一一七八）四月、蜀を離れて帰郷する途中、ここを訪れている。○春 暮 暮春に同じ。○挂猿枝 猿がぶら下がる木の枝。○蜀船 蜀を離れて故郷に向かう船。○屈原塔 忠州の東にある。北宋・蘇軾にも、やはり忠州で書かれた「屈原の塔」詩がある。○空山 人気のない山。陸游は「忠州の禹廟」詩（『詩稿』卷十）でも「空山 夏禹の祠」とうたっている。○夏禹 夏の禹王。大洪水を治め、夏王朝を創始したとされる中国古代の伝説的帝王。○夏禹祠 禹廟または大禹廟ともいう。忠州の南の屏風山にある。

《三峽の歌》その九

私がかつて暮春の時節に南寶郡をふらりと訪れ、蜀を離れて故郷に向かう船を、猿がぶら下がる木の枝につないだことがある。雲は長江の岸辺にある屈原の塔のあたりをさまよい、花は

人気のない山中にある夏の禹王の祠のあたりに散り落ちていた。

題拓本姜楚公鷹

拓本の姜楚公の鷹に題す

『劍南詩稿』卷六十四。二首連作の第二首。開禧元年（二二〇五）冬、陸游八十一歳、山陰にて。いわゆる題面詩であり、精悍な鷹の絵に託して、憂国の悲憤をもらしている。『校注』第七冊、三六四五頁。『全宋詩』卷二二一七。第四十冊、二五四一—三五頁。『全宋詩』は詩題の下に「二首」の二字がある。

○●○○○●●●○
 弓面霜寒斗力増 弓面 霜 寒く 斗力 増す
 ●○○●●●○○○
 坐思鉄馬蹴河水 坐ろに思ふ 鉄馬の河水を蹴るを
 ●○○●●●○○●
 海東俊鶴何由得 海東の俊鶴 何に由りてか得ん
 ○●○○○●●●○
 空看綿州旧画鷹 空しく看る 綿州の旧画鷹

〔韻字〕増、氷、鷹（下平声十・蒸韻）

○拓本 石碑や器物などの文字や模様を墨で紙にすり写したも

の。いしずり。○姜楚公鷹 姜楚公は、唐代の画家姜皎のこと。上邽（甘肅省）の人で、鷹などの鳥の絵にたくみであったという。玄宗が即位すると太常卿に昇進し、楚国公に封ぜられた。『歴代名画記』巻九に伝がある。唐・杜甫には「姜楚公の画く角鷹（クマタカ）の歌」詩があり、陸游には本詩の他に「綿州の録事参軍の庁にて姜楚公の画鷹を観る。少陵（杜甫）の（その）為に詩を作れる者なり」詩（『詩稿』巻三）がある。○弓面 弓の表面。○斗力 弓をひく腕の力。○坐 何とはなしに。○鉄馬 鉄の装甲を施した軍馬。陸游の「十一月四日風雨 大いに作る」詩其の二（『詩稿』巻二十六）に「鉄馬 氷河夢に入り来たる」という類似の表現が見える。○河水 黄河の表面をおおう水。○海東 海よりも東の地域。日本をさす。北宋・歐陽修の「奉使道中五言長韻」詩に「輕禽 海東より出ず」とある。○俊鶻 俊敏なハヤブサ。○綿州 成都の近くの地名。

《姜楚公が描いたタカの絵の拓本に、詩を書きつける》

弓の表面には冷たい霜が降り、弓を引く腕の力はみなぎる。何とはなしに、鉄の装甲を施した軍馬のひづめが、黄河の水を蹴るさまを夢想する。海の東に産するという俊敏なハヤブサを、どうしたら手に入れることができようか。その昔、綿州の役所の壁に描かれていたすばらしいタカの絵（の拓本）を、空しく見つめるばかりだ。

秋思

しゅうし

『劍南詩稿』巻七十二。十首連作の第七首。開禧三年（二二〇七）秋、陸游八十三歳、山陰にて。前半後半ともに対句で構成された、叙景的な作品である。『校注』第七冊、三九九九頁。『全宋詩』巻二二二五。第四十一冊、二五五三六頁。『全宋詩』では詩題の下に「十首」の二字がある。なお本詩は『宋詩鈔』にも収録されている。

○●○○○●●○

桑竹成陰不見門

桑竹 陰を成し 門を見ず

○○○●●○○○

牛羊分路各歸村

牛羊 路を分かちて 各おの村に歸る

○○○●●○○○●

前山雨過雲無迹

前山 雨 過ぎ 雲 迹 無く

●●○○○●●○○○

別浦潮回岸有痕

別浦 潮 回り 岸 痕 有り

〔韻字〕門、村、痕（上平声十三・元韻）

○成陰 こんもり茂って木陰をなしている。○前山 前方にそびえる山。○別浦 川の流れが海に流れ入る所。○潮回 潮が引く。

《秋の思い》

桑と竹がこんもり茂って木陰をなし、（それに覆われて）家の門は見えない。牛と羊は道を分かち、それぞれの村へと帰って行く。前方にそびえる山は、雨が通り過ぎて雲は跡形もない。川の流れが海に流れ入る所は潮が引き、岸辺に（満潮時の水位の）痕が残っている。

以上が、『宋詩別裁集』巻八に収録された陸游の七言絶句のすべてである。同書に収録されたその他の作品についても、これから少しずつ紹介して行く予定である。

注

(1) 筆者が参照した三種類の『宋詩別裁集』は、すべて出版説明もしくは点校説明に「六百四十五首」と記しているが、厳密に数えたところ、実際は六百四十七首であることが判明した。

(2) 宋代詩文研究会訳注『宋詩選注1』（二〇〇四年一月、平凡社東洋文庫）三七七頁を参照のこと。

(3) 『宋詩別裁集』全体では、七言律詩「遊山西村」と「書憤」の二首が『宋詩選注』と重複している。拙稿「『宋詩選注』に収録された陸游の作品について」（二〇〇五年十二月、宋代文学会発行『橄欖』第十三号に掲載）を参照のこと。

(4) 宋代詩文研究会訳注『宋詩選注3』（二〇〇四年十二月、平凡社東洋文庫）九二頁を参照のこと。

(5) 『宋詩別裁集』巻八には、他に北宋・蘇軾の七言絶句「海棠」一首が収録されている。その後半は「只恐夜深花睡去、高烧銀燭照紅粧（只だ恐る 夜 深くして 花 睡り去らんことを、高く銀燭を焼き 紅粧を照らさん）」とうたっており、陸游の連作の其の八との類似性が認められる。

(6) 最初の「次韻周輔道中」から「梨花」までは制作年代順に配列されているが、この「春遊絶句」で制作年代がいったん逆戻りし、それから再び制作年代順に配列されている。このことは、「梨花」までの九首と「春遊絶句」からの六首を、別の編者が選んだ可能性を示唆するものと思われる。なお「春遊絶句」は「二四不同、二六対」の規則に合わない箇所が複数存在する上、一句目の「春郊行」は「二三連」、三句目の「逢」は「孤平」になっている。したがって、本詩は厳密には近体の絶句と見なすことはできず、古詩もしくは古絶句に分類されるべき作品であると考えられる。